一番の中心的なテーマです。

この方式で伝道すれば、自分で講義し、自分で話もするようになります。そのことによって、皆さんに実力がついてきます。最初は三か月で一軒しか復帰できなくても、一年もすれば、三家庭ぐらいは復帰できます。三年すれば、三十家庭、四十家庭とつながっていくのです。それを始めるかどうかです。

それが積み重なっていけば、百六十家庭が数年後に祝福を受けるようになっていきます。いったん運勢が巻き起これば、どんどん動き出します。皆さんがしたように、皆さんの霊の子女たちも同じようにしてくれるのです。

ですから、問題は、皆さんが最初にどれだけ犠牲の愛を投入して、対象者を感動させるか、にかかっています。それさえ実践すれば、後の者たちが同じように始めるのです。今までは、そのような基準が立たなかったので、モデルができなかったのです。

イエス様は第一弟子、三弟子、十二弟子というように伝道していかれました。同じように、私たちも第一弟子を立て、三弟子、十二弟子を伝道していくのです。そして、そこで運勢を巻き起こしていけば、氏族的メシヤは数年のうちに必ず勝利できます。

そして、百六十軒の人々をみんな天国に連れていくと同時に、世界を救う使命を果たすことのできるエバ国家になることができるのです。

月刊誌・ムーンワールド
定期購読申込案内

定期購読料（送料共）
半 年　4000円
1年間　8000円
2年間　16000円
毎月1日発売　B5判　24ページ
定価500円（税込）　送料190円

＜お申し込み方法＞

さくら銀行　渋谷西支店
（口座）（店番号）（口座番号）
普通　789　3739888
振込先　（株）光言社

①上記の銀行口座に定期購読料をお振り込みください。（振り込み料は払い込み人負担）

②その明細と定期購読期間（平成○年○月号より、半年、1年間、2年間）、住所、氏名、電話番号、郵便番号、申し込み冊数、振り込み年月日を（株）光言社・受注センターまで「月刊・ムーンワールド係」と明記し、郵便かFAXで必ずお知らせください。

＜送り先＞
〒150東京都渋谷区宇田川町37-17
宮坂ビルB1（株）光言社受注センター
「月刊・ムーンワールド係」
FAX.03-5478-1521
TEL.03-3460-0429

特別寄稿

原理から見た宗教統一（1）

― 儒教と宗教統一（上）―

韓国・統一思想研究院院長
李相軒（イサンホン）
（３６家庭）

一　序

人類歴史を宗教的側面から見ると、人類はすでに先史時代から独特な信仰形態を成しながら生きてきた。自然現象に無知であった原始人たちは、万物に神が宿っていると信じつつ、アニミズムあるいはトーテミズムなどの呪術的な信仰形態を持ちながら生きていくうちに、偉大な宗教的人物の誕生とともに高等宗教が出現することにより、歴史は新しい転換点を迎えるようになった。このような高等宗教の出現は、特にメシヤの降臨と深い関係があるということが分かる。

特に原理的観点から見るとき、宗教は六数期間の法則に従い、メシヤ降臨の六数期間前から具体的な形態を呈しながら出現した。仏教がその例に相当し、ユダヤ教もやはりそれに相当すると見ることができる。儒教では孔子誕生の千数百年前である堯舜時代を彼らの理想の時代として見なしてきたが、夏殷周三時代を経るうちに、すたれてきた教えが、孔子の出現を転換点にして具体的な形を備えるに至った。しかしながら、儒教は今日私たちが見るように「修己治人」の限界を克明に現している。次の本論で、これについてより具体的に調べてみよう。

二　本論

(一)　儒教の成立と主張と信条

(1)　儒教

儒教とは孔子の思想を崇める教えをいう。孔子（BC五五二～BC四七九）は中国魯の国の昌平郷陬邑で生まれ、名は丘、字は仲尼という。

古代中国から発生した儒教は、中国哲学の主流を成して、中国をはじめとする東アジア文化圏に大きな影響を与えた宗教である。

儒教の本旨は「修己治人」、すなわち、まず自分を修めてから人を指導するということである。したがって最も倫理的でありながら、天を崇拝することにおいても道徳的な宗教であるといえる。儒教は孔子学派という意味で、先秦の諸子の一つとして儒家、儒学という言葉がともに使われたが、十世紀の宋代には、孟子を高く尊重して儒教を孔孟の教えと呼ぶ一方、道学、理学または宋学、程朱学という呼び方に発展した。

(2)　儒教の成立と発展

儒教の祖であり大聖として知られた孔子は、故国である魯の国では志を果たせず、いろいろな他国を訪問しながら先王の道を十五年間も力説した。晩年に故郷に帰ってきて『詩經』、『書經』を整理し礼楽を選定した。そして、魯の歴史である『春秋』を著し、晩年は易に関心を持って、その解釈書である『十翼』を書いた。

孔子の思想の精髄は、孔子の他界後に弟子たちが収集、編纂した彼の言行録である『論語』に現れている。孔子が最も重視した価値観は「仁」である。「仁」の真の意味に関しては、いろいろな解釈があるが、広い意味では、知・愛・勇などの徳を含んでおり、狭い意味では「人を愛せよ」という意味を持っている。

孔子に従う弟子は、およそ三千人もいて、その中に七十二賢と十哲がいた。この中でも顔回は、最もすぐれた弟子であったが、早く世を去り、子夏、子游、子張たちが孔子の思想の伝播に努めた。

孔子の学は曾子（＝子輿）に伝わり、次に孔子の孫である子思に継承された後、孟子に受け継がれて大きく発展した。

孟子は、孔子の「仁」に「義」を加えて「仁義」の道を力説し、正道政治を諸侯たちに勧告する一方、覇道を排撃して革命と民主思想を容認した。孟子は特に、性善説を主張して後世に大きな影響を与えた。

(3)　儒教の主張

1　天に対する見解

a　孔子の見解

天に対する孔子の観点を見てみよう。孔子は人間の生命の根源と自然現象の背後に、それを支配し摂理する見えない実在があるということを確信したようである。孔子は「激しい雷雨暴風にあうと、必ずいずまいを正された」（迅雷風烈必変：『論語』郷党篇　二五）のである。

孔子の弟子たちは、師のみ言を一つひとつ教えることだけで満足し、無言の世界に充満している真理を黙想で直感することをおろそかにする傾向があった。これを正すために孔子が、「私はこれから何も語るまいと思う」と言ったら、弟子の子貢が驚いて、「先生がもし語ってくださらないと、わたくしども弟子たちは何にもとづいて語りましょうか」と問うた。

孔子は「天は何を語るだろう。それでも四季は運行し、万物が生育する。天は何を語るだろう」と答えられた。天が何も言わないように、私が言葉で表さなくても、あなたたちは私のことを知り、私が考えている道理が理解できるのではないのか（子曰、予欲無言、子貢曰、子如不言、則小子何述焉、子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、

孔子

天何言哉：『論語』陽貨篇　一九）、というのであった。弟子と師の観点の違いをよく表している対話である。

孔子が衛国へ行ったとき、大臣の王孫賈が「願いごとなら奥の神棚の大神さまより、へっついの荒神さまよといいます。この諺の意味をお聞かせください」（衛の国君、霊公のところに参るより、自分のところに口入れをたのむことが先決だという意味）と尋ねると、孔子は次のように答えた。

「とんでもない。もし天の神に罪過をおかしたものは、どこにお許しを祈る場所がありましょうぞ」（王孫賈問曰、与其媚於奥、寧媚於竈、何謂、子曰、不然、獲罪於天無所禱也：『論語』八佾篇　一三）

孔子が、淫らな者として知られた衛の国の霊公の妻である南子に会っているのを弟子の子路が見て、これを不潔に思い不愉快な表情をした。これを見た孔子は、子路にたいして「私に、もし間違いがあったならば、天が神罰を下されようぞ。天が神罰を下されようぞ」（子見南子、子路不説、夫子矢之曰、予所否者、天厭之、天厭之：『論語』雍也篇　二八）と語られた。

孔子は、自分の修養段階と発展過程を述懐するとき、

『論　語』

「私は十五歳で学問に志し、三十歳で一本立ちとなり、四十歳で迷いがなくなり、五十歳で天から与えられた使命をさとり、六十歳で人のことばをすなおに聞けるようになり、七十歳で自分の思うままに行ってもゆきすぎがなくなった」（子曰、吾十有五而志乎學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩：『論語』為政篇　四）と言った。人生において学徳の円熟期である五十で天命を知ったと言って、天命を知ることがいかに難しいかを示した。

以上、孔子の「天」観を調べてみた。孔子が明らかにした天に対する教えは他にもたくさんあるが、ここでは省略することにする。

b　統一原理から見た孔子の「天」観の問題点

孔子が「天」を説明するとき、時には自然を支配している大主宰者である超越的能力者として表現したり、時には人間の生死禍福を主管する人格的存在として表現している。

『礼記』では「万物は天に根をおいている」（万物本於天）と言い、『尚書』（＝『書經』）泰書では「天地は万物の父母であり、人は万物の霊である（惟天地万物父母、惟人万物之霊）と言い、『詩經』の大雅では「天がすべての人を生んだ」（天生烝民）と言った。

ところが孔子は、「天」が人間や宇宙とどういう関係にあるか、さらには天の能力や属性はいかなるものか、明らかにしていない。

また万物の運行は何に基づいたものか、そして天と人間とは具体的にどういう関係にあるかについても明らかにしていないのである。このように全般的な天に関することや、天と人間との関係が明確にされない限り、人生と宇宙の問題の根本的な解決は不可能である。

c　統一原理から見た「天」の意味

統一原理から見る「天」は、人間と宇宙を創造した人格的な創造主としての「神」を意味する。神は人間と宇宙を造られた創造主であり、超越的能力を持っておられる大主宰者である。統一原理で言うこのような神を、より具体的に説明したのが統一思想の「原相論」である。

「原相論」は、原因的存在である神の属性に関する理論を取り扱った部分であるが、神の属性には「形の側面」と「性質、性稟、能力などの機能的側面」がある。形の側面を「神相」といい、機能的側面を「神性」という。「神相」とは、「性相と形状の二性性相」と、「陽性と陰性の二性性相」、および「個別相」をいい、「神性」とは、「心情」、「ロゴス」、「創造性」などをいう。

ここで、被造物としてのすべての存在は、原因者である神の姿に似た個性体なので、神の「神相」に似ている。すなわち、被造物は神の性相と形状に似て、見えない無形的

側面と見える有形的側面から構成されている。また、陽の側面と陰の側面を持って存在している。

「神性」にはいろいろあるが、その中で重要なものは「心情」、「ロゴス」、「創造性」である。「心情」とは、愛を通して喜びを得ようとする情的衝動である。したがって、喜びを得ようとされた「心情の神」は、愛と喜びの対象が必要であり、その愛と喜びの対象として人間が必要であった。

ところが、その人間も神に似て喜びの対象が必要であった。それで神は、そのような喜びの対象として、人間と万物を創造せざるを得なかったのである。

また、神はロゴス、つまり「理法」をもって万物を創造された。「理法」とは、理性と法則を合わせた概念である。したがって、すべての万物には理性と法則が宿っており、万物はみな理性的な面と法則的な面を同時に持っているのである。

言い換えれば、万物が理法的側面を持っているのは、原因者であられる神が、理法的存在であったからである。そして、「原相論」は、「原相」が「四位基台」の構造をもって存在し、「正分合作用」を通して発展するという事実を明らかにしている。

2 「仁」に対する見解

a 孔子の「仁」の概念

孔子の主要な教えの中の一つである「仁」は、論語の全編にわたって述べられているが、「仁」が何かという具体的な定義はない。孔子と弟子たちとの問答の中から「仁」の概念を探ってみることにする。

孔子は司馬牛に対して、「仁徳ある人は、ことばがすらすら出ない」（子曰、仁者其言也訒：『論語』顔淵篇　三）と言い、弟子の子貢の「仁」に対する質問に、「職人はいい仕事をしようと思うと、まず道具を研ぐ。一つの国家にあっては、まずその役について大夫の中の優れた人に仕え、士の中の仁徳のある人と友になることである（子貢問爲仁、子曰、工欲善其事、必先利其器、居是邦也、事其大夫之賢者、友其士之仁者也：『論語』衛霊公篇　一〇）と言った。

樊遲が「仁」について問うと、孔子は、「ふだんのふるまいはへりくだり、仕事に当たっては慎重で、他人との交際では誠実であれ。そういう人なら、たとえ野蛮人の住む地方に行っても、決してほうっておかれないはずだ」（居處恭、執事敬、與人忠、雖之夷狄、不可棄也：『論語』子路篇　一九）と答えた。

続いて孔子は、「まず難しい仕事を行っておいてから、後で利益を収める、それが『仁』というものだ」（先難而後獲、可謂仁矣：『論語』雍也篇）と言い、また別の所では、「仁」について「人を愛することだ」（子曰　愛人：『論語』顔淵篇　二二）とも言った。

また顔淵（＝顔回）が「仁」を問うと、孔子は「自己に打ちかって礼の規則に立ち返ることが『仁』ということである。一日でも自己に打ちかって礼の規則に立ち返ることができたら、天下中の人がこの仁徳になびき集まるであろう。仁徳の実践は自分の力が頼りで、他人の力に頼ってできることでは決してないのだ」と答えた。

顔淵が、さらにその実践要項について尋ねると、孔子は「礼の規則に外れたものに目を向けてはいけない、礼の規則に外れたものに耳を傾けてはいけない、礼の規則に外れた発言をしてはいけない、礼の規則にはずれた動作をしてはいけない」（克己復禮爲仁、一日克己復禮、天下歸仁焉、爲仁由己、而由人乎哉、顔淵曰、請問其目、子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動：『論語』顔淵篇　一）とも答えた。

先に述べたとおり、孔子が答えた「仁」に対する説明は「仁」の基本定義ではなく、状況によって変わる「仁」の現実的概念にすぎなかった。

b 孔子の「仁」に対する問題点

孔子が言った「仁」の内容は、一種の状況論理であり、その根本は愛を実践するためのものであることが分かる。ここで重要な問題は、「仁」の概念が正確に何かということである。

なぜなら孔子が言う「仁」も、学者によってそれぞれ異なる解釈が行われることもあるからである。したがって、「仁」の定義が明らかにされてこそ、「仁」を実践する人間行為の正当性の可否がはっきりしてくる。

c 統一原理から見た「仁」の意味

先に樊遅が「仁」は何かと尋ねたら、「人を愛することである」と孔子は答えたというが、ここで「仁」を「愛」であるというのは、イエスが「隣人を自分のように愛しなさい、怨讐を愛しなさい」と言われたみ言と同じ意味である。すなわち、キリスト教の「愛」と儒教の「仁」は同じ徳目である。

しかし、人を愛する場合、「愛」の形態は状況により違ってくる。つまり、相手の年齢、性別、老若によって「愛」の表れる形は違うのである。「愛」には、父母と子女の間の「縦的な愛」と、夫婦の間、兄弟の間の「横的な愛」がある。ここに縦的、横的な価値観が成立する。

また、「愛」には性的な愛もある。それは結婚した男女の間の愛、すなわち「夫婦愛」である。夫婦以外の異性の間の性的愛、つまり非原理的な性的愛は、絶対に許されないのが統一原理の観点である。人間堕落の根本原因が、非原理的な性的愛にあったからである。

3 『大学』の「八条目」

a 『大学』の「八条目」の概念

朱子は、「修己」から「治人」に至る儒家思想の重要な項目について次のように述べた。すなわち、「事物を究明した後に知に至り、知へ至った後に意が誠になり、意が誠になった後に心が正しく、心正しき後に身を修め、身を修めた後に家を斉え、家を斉えた後に国を治め、国を治めた後に天下が平和になる」（物格而後知至、知至而後意誠、意誠而後心正、心正而後身修、身修而後家齊、家齊而後國治、國治而後天下平・『大學』大學經）と言ったが、ここで導かれる「格物」、「致知」、「誠意」、「正心」、「修身」、「斉家」、「治国」、「平天下」の八つの概念を「八条目」という。

b 「八条目」の問題点

「修己」から「治人」に至る過程は、漸進的な原則に従って一歩一歩発展する過程である。もちろん、その究極的な目標は、「平天下」で「天下為公、世界大同」の世界であることが分かる。

ところが、「修身した後に斉家し、斉家した後に治国……」と言ったが、このような道徳的修養論理は、さまざまな要因による矛盾対立の現実の中で生きている人々の生活感情と一致するだろうか。問題は、心身を修めると、果たして一家が整えられるか、であり、一家が整えられると、果たして国が治められるかである。つまり、経済問題を見過ごしたところに問題がある。経済問題を度外視した倫理観は、単純な理想論にすぎないからである。

c 統一原理から見た「八条目」の見解

すべての存在は、見えない部分、すなわち「性相」と、見える部分、すなわち「形状」が、主体と対象の相対的関係を結んで授受しながら存在し、作用し、繁殖している、と原理は主張する。「性相」と「形状」の相対的関係のない存在はあり得ない、というのが原理的観点である。「性相」が精神的なものであるなら、「形状」は物質的なものである。「八条目」は精神的なもの、形而上学的なものを指摘したが、物質的なもの、形而下学的なものは指摘しなかった。

物質は、自然（万物）の一部分として人間の主管の対象になる。主管の主体である人間は、主管の対象である万物を通して喜びを得るようになっている。それで聖書の創世記には、「生育せよ、繁殖せよ、万物世界を主管せよ」と書かれているのである。

物質的なものを追求する人間の欲望は、創造されるときから人間に与えられた一つの要件であった。したがって、精神的なものと物質的なものは主体と対象の不可分の関係にあるのに、「八条目」では現実的、物質的なものを見過ごしている。

4 「大同世界」に対する見解

a 「大同世界」の概念

人間の行為を通し、天道に従って得られる知徳の中でも最も重要なのが「大同理想」の具現である。すなわち、一家族としての人類の平和世界実現である。『礼記』「礼運篇」を見れば、次のように記されている。

「大道が行われた五帝の時代には、天子は天下を公有物として、賢人や能力ある人を選び用い、天子の言うことは、うそ偽りがなく、行いは人民に対して親切である。だから、

人民はその親だけを親とせず、その子だけを子としない。その結果、老人たちは天寿を全うし、働き盛りの人たちは、その労働力を役立て、子供たちはみな成長を遂げ、男やもめや未亡人、孤児、子供のいない人、かたわや病人の人たちはみな保護を受けて、生活に困らない。男はおのおの職業を持ち、女はみな良縁に恵まれる。金銭や価値ある物品は、地べたに捨てられているのは良くないが、自分のためにしまっておくと限ったわけではなく、貧乏な人があれば、すぐに与える。労力は身体から出さないことをきらって、労苦をいとわずに働くが、自分のためにばかり労働するのではなく、人のために働いて惜しまない。こういうわけで、人民たちが純朴だから、謀略は用いられなくなって起こらず、窃盗や世間を乱す悪者は起こらない。だから、外の戸は、かんぬきをささない。風を防ぐだけである。以上のような世の中の状態を、大同という」

（大道之行也、天下爲公、選賢與能、講信修睦。故人不獨親其親、不独子其子、使老有所終、壮有所用、幼有所長、矜寡孤獨廢疾者、皆有所養。男有分、女有歸、貨惡其棄於地也、不必藏於己、力惡其不出於身也、不必為己。是故謀閉而不興、盗窃乱賊而不作。故外戸而不閉、是謂大同）

b「大同世界」の問題点

「大同世界」を現代語に解釈すると、次のようになる。

「『大同世界』とは、公明正大で公平無私で永久不変の真理が実践されている博愛、平和、正義の世界である。そして、全人類が一家族として相思相愛する共同の福祉社会である」

しかしながら、このような見解は、非常に素朴な「理想主義」的な観点である。つまり、天道が行われると天下は公的なものになるということは、一つの仮定に過ぎないのであり、その天道が実際に行われるという保証はどこにもない。なぜだろうか？　人間は古今東西、老若男女を問わず、だれもが心の中に善を指向する本心と、自分も望まない悪を指向するもう一つの心、つまり邪心を持っている矛盾的存在であるからである。

善と悪の、相反する方向に向かって作用する二つの欲望を持っている人間なので、善なる行動をして喜んだり、望まない悪なる行為をして密かに悩んだり、苦しんだりする。このように矛盾性を持っている人間こそ、現実世界に存在する人間なのである。そして故郷を離れて他国で暮らす者

が故郷を懐かしむように、理想の中で生きるようになっていた人間がその理想を失ってしまったので、常に失った理想を実現しようと身悶えしながら生きているのが、今日の人間の姿である。

c 統一原理から見た「大同世界」

人間が矛盾性を持つようになった原因は何か？　そして、その矛盾性を解決する方法は何なのか？　人間が望んでいる「大同世界」の実現はどうすれば可能なのか？　統一原理によると、人類の始祖であるアダムとエバが、エデンの園で「善悪を知る木」の実を取って食べないで完成していたならば、神と一体となり、善なる子女を繁殖し、善なる家庭、社会、国家、世界をなすことができたはずである。

その世界は、神を中心とした善の理想が実現された世界であり、悪のかけらもない善なる世界であり、そのような世界を天国という。この天国がまず地上で成され、人間がそこで天国生活を行い、肉身の死後は、霊人体が自然に善なる霊界に入って天上天国で暮らすようになっていた。

人間が完成して実現する世界は、一なる神に侍りながら、全人間が兄弟姉妹になって愛を授受する世界となるために、その世界には対立や葛藤、抑圧や搾取などはあり得ない。ただ、神に喜びと栄光をより多くお返しするために競争する世界であり、神の理想であると同時に、人間の希望である善の理想が実現される世界である。

アダムとエバの堕落によって、その世界が成されなかったため、神は後のアダムであるイエスをこの地に送ってくださった。しかし、イエスは再臨の約束を残して十字架で亡くなられたので、そのみ旨は成されなかった。後にその約束どおり、人類の真の父母として、この地に再臨されるようになったのである。

真の父母は、人類の始祖であるアダム、エバが成そうとして成し得なかったみ旨、後のアダムであるイエスが成そうとして成し得なかったみ旨を成し遂げるために、天から降臨されて、「四大心情圏と三大王権」、「三大主体思想」、「共生共栄共義主義」等の教えをもって、その実現のために苦労されておられる。したがって人類は、真の父母を迎えることにより、人間の希望である理想世界の実現が可能になったのである。

（つづく）